

こおろぎ

発行日 2005年4月1日 **No.145**
発行元 株式会社
オリジン・コーポレーション
代表取締役：杉井保之
〒426-0044 静岡県藤枝市大東町777-1
TEL 054-636-4300 FAX 054-636-6187
E-mail origin@ck.tnc.ne.jp
URL <http://www.origin-co.com>

はがき祭り

4月3日に、「第二回 静岡はがき祭り」が行われました。

今年の講師は、「第一回はがき祭り」に遠く熊本からご夫婦で参加してくれた石川健次さんです。石川さんは、両目をご不自由なのに、目の見える私にも描けない素晴らしい絵や文字を描くだけでなく、目の不自由な方たちに盲導犬を寄付されている方でもあります。

第一回の昨年は広島や山梨からの参加がありましたが、今年は、埼玉、愛知、岐阜などから参加してくださった方たちがあり、おかげさまで本当に温かい会になりました。

ハガキを書く人たちは、本当に良い人達ですね！

そんな中、今年も三名の仲間が体験発表をしてくれました。

一人目の波多野勝彦さんは、お父さんの会社が倒産して、家も財産もなくなったが、ハガキを書いてきたおかげで、倒産以前よりも豊かな人生を手にした話をしてくれました。

二人目の飯田由美さんは、自分が精神的に障害を負ってしまい、子どもさんを施設に預けなくてはならなくなったのですが、毎日、施設にハガキを送り、この3月31日から子どもさんと一緒に住めるようになった話をしてくれました。

下のハガキは、飯田さんからのハガキです。子どもさんと暮らせる幸せが、私にまで届いてくるようですね。

今日、嬉しいことがありました。子どもが一人で家まで帰ってきました。まだ四回くらいしか歩いていない道を一人で頑張りました。私が心配で迎えに出ると家のそばまで来ていて、ニコニコ笑顔で「お母さん、ただいま」と言ってくれました。「明日は一人で行く」と言っています。家に帰ると学校であったことを話してくれ、「お母さん、二十八日は遠足だよ」と胸をワクワクさせています。土曜日には友達の家遊びに行くのだと嬉しそうです。学校が好きと言ってくれて嬉しいです。とても頑張っている子どもを見ると、私も頑張らないと思いません。

三月三十一日から、娘と一緒に暮らせるようになりました。娘は、今日から初めてのランドセルです。施設にいたときは、二階に学校があったので、手提げバックだけでした。せつかく出来たお友達を大切に、学校を好きになっただけです。
お互い障害があるため、勉強についていけない心配ですが、心の成長を応援してあげたいと思います。勉強は親子で勉強します。四年生ですが、難しいので私も勉強します。一緒に住めるようになって本当に幸せです。

三人目は、川根町で薬店を営んでいる中村勝徳さんでした。

ハガキと出会ったころは、軽いうつのような状態のときだったそうで、家族や友人にハガキを出すと、本当にどうかしてしまったのではないかと心配されたそうです。しかし、ハガキを書くためには、行動したり、観察をしなくてはならず、ハガキを書いているうちに心が軽くなっていったそうです。最初は「クサイ言葉～！」と言っていた子どもさんたちも、最近では何も言わなくなり、卒業式には「15年間ありがとう。両親のような両親になりたい」と書かれた手紙を子どもさんからもらったと嬉しそうに話してくれました。

誰の人生にも色々なことがあります。そうしたことを、ともに知る仲間がいる人は、それだけで幸せだと痛感した一日でした。

何が問題か？

次のような相談を受けたとき、どのように対応しますか？

相談者・・・年齢36歳くらいの夫婦、二人とも高学歴
父親は公務員、母親は専業主婦

相談内容・・・次女(中学2年)が学校を休みがちで、何とか学校に行かせたいのですがどうしたらよいでしょうか？
次女は、毎日、夜遅くまでテレビを見ているので、朝起きるのが辛いのだと思います。

前に父親とテレビを見る時間を決めたことがありますが、約束は守りませんでした。そこでテレビを禁止したのですが、長女(高校1年)や三女(小学校6年)が父親に食って掛かり、日に日に反発がひどくなって行ったので、一週間ほどでテレビを許してしまいました。家族は、夫婦と娘3人の5人家族です。

ご両親に相談の目的を伺うと、「娘さんが学校に行くようになること」との答えでした。しかし、この娘さんが学校に行ったら目的は達せられるのでしょうか？

ほとんどの親は、子どもに「幸せになってほしい」と願っています。このご両親も娘さんに幸せになってほしいと願っているから、こうして相談に来ているのだと思います。おそらく学校に行くことを望むのも、「学校に行ったほうが幸せになりやすい」と考えているからでしょう。その親心は十分に分かるのですが、私には子どもさんを思うその気持ちが、今の状況を作っているように見えるのです。このテレビは誰のものでしょう？

よく「家のテレビ」と言う人がいますが、このテレビは、代金を払い、電気代を払っているお父さんの物です。ですから子どもさん達は、お父さんのテレビを見せてもらっていることになります。

それでは、テレビを見せてもらう人が、テレビの持ち主に文句を言うと、テレビの持ち主はテレビを見せなくなるのでしょうか？

普通は、見せなくなるものですが、この家では見せているのです。それも、少しの文句のうちは見せずにいて、聞くに堪えないほどの文句になると見せるのです。

つまりこの家では、テレビを見せるか見せないかを決めるのは、持ち主である父親ではなく、子ども達(の文句の程度)なのです。

私は、たとえ娘さんが学校に行って優秀な成績をとったとしても、「人を不快にするという方法で、自分の願いを叶える」というやり方を身につけている以上、幸せにはなりにくいと思います。

皆さんの家庭や職場にそうした人が入ってきたらどうでしょう？

私たちは、子どもの幸せを願って豊かな生活を与えてきました。しかし、そのことだけに目を奪われて、大人として伝えなくてはならない大切なことを、自分自身も忘れていたのかもしれない。

「どうしたら幸せに生きられるか」ということを忘れ、ただ物を与え、子どもと揉めないことを「愛情」と勘違いしている気がするのです。

私は決して「親が偉い」とか「もっと厳しくするべきだ」と言っているのではなく、事実合わない生き方は自分を苦しめると言いたいのです。

皆さんの家では、こうしたバーチャルが横行していませんか？

最近、企業においても部下を指導できない管理職、リーダーシップをとれない経営者が増えてきているようです。